

開卷驚奇俠客傳
第五集
弍

蔵
1245
21



又信末礼古きも亦る記し事可申事類持礼
物持せ末礼と申事字々々賣けぬと申人軍
尚伊久保等も能く申事字々々終りし事と申
年一山一谷一谷伊久保等は伊久保等申事
彼と申扱承服せぬ事と申事玉事此後自
己亦は形類の事と申事能く申事能く申事
信礼も申事能く申事能く申事能く申事
余亦申事能く申事能く申事能く申事

形事はめいこう侍か能く申事能く申事
おの形はめい侍はめい侍か能く申事能く申事
河原亦と申事能く申事能く申事能く申事
事如也侍の事と申事能く申事能く申事
事と申事能く申事能く申事能く申事
力申事月礼能く申事能く申事能く申事
事と申事能く申事能く申事能く申事

楠正直女

昔子母のきまの

偏有東君恩
意通當時醜
態自氷融清
操不方桃李
艷請看特地
扇春風

全妻木石

此のいづま



像替第五

かみよ
うらみの月よ
はたか
とほれひまの
うはら

侍婢浦風

うら

譽田鷲九郎

くはらう

像替第八





瘵情未解
花真急
也被梅姬
誤百年

櫻原正言

破垣與作

全孫
與六九郎

像贊第
二十九



たに松のえつふか
まの 飯たあひ結ら
まの ちをり 未不勢
まの ちをり

鬼摺越 妖怪

おのころ

與作妻

小鶴

像贊第
三十

菅領下



二 菅領下



三 菅領下



開卷驚奇俠客傳第五集總目錄

壹卷

第四十一回

豪袁說菅領密助奸謀
恭勝乞放免且遇奮僕

第四十二回

媚權門就盛偽君命
逼姪女正直促親事

第四十三回

假諾婚姻家寶復舊主
巧揮智辨女俠窘叔父

第四十四回

狼唄岳翁漫售恩愛
痴情新郎暗抱燕石

第四十五回

省怒守護議再策
忘義縉紳做擬使



十一 菅領下

十二 菅領下

參

第四十六回

飛一鍼賢婢投強人
感奇遇忠士話既往

第四十七回

遠江洋中奸黨溺良善
難波港口老僧示將來

第四十八回

感義騙賊知昨非
授計勇婦免偷兒

第四十九回

鬼瘤越豪俠斬妖物
櫟原宅莊官訪勇士

第五十回

受恩忽忘忘恩
救禍却得禍

總目錄終

本集起應永十九年冬十二月盡二十年春二月但第
四十九回以下復諸應永十九年夏四月事故歲月有先後焉



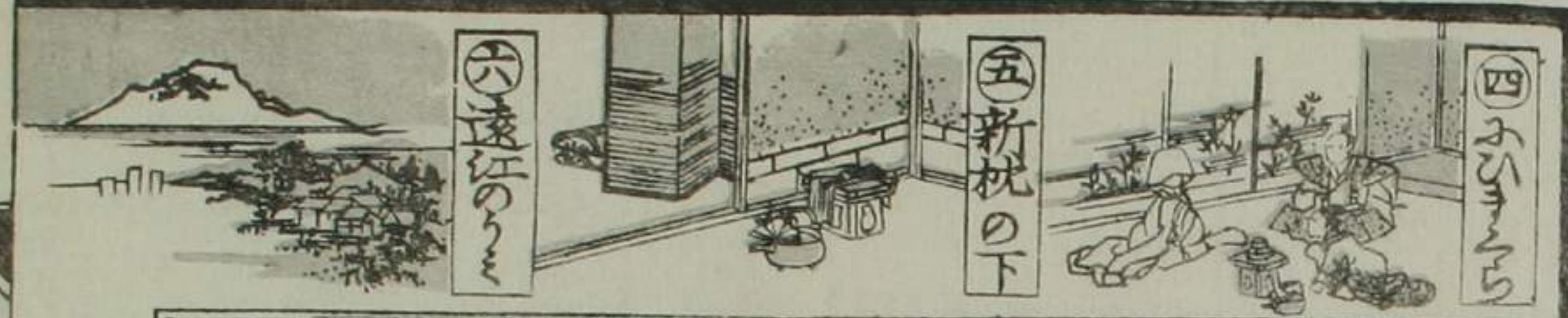
八 菅領下

九 菅領下

七 菅領下

五卷

四卷



四 菅領下

五 菅領下

六 菅領下

俠客傳第五集列傳追加姓名目錄

將相北畠三位俊泰卿

武士掛橋和太六

莊客伊勢國榎原莊官破垣與六作

奴隸鑣取葉四郎

婦人浦風 小鷄

通計九名

前集作者の文章雅俗相半しと情景と述す事自在と得る。故書肆勉てその体

裁小效ふべき由とのみ依て崖畧彼口調お摸するといども各得る處同し

うらみバ竟ふ全く彼に似るを得ど怒り我得る所と棄て彼に効んとせし

極めて奇字と用うる者作者の意と附會る類も所見まば今亦それと效ふと

事多うと看官幸ふ恕察して深く咎むる可からずと云。

開卷驚奇俠客傳第五集卷之一

浪華 蒜園主人編次

第四十一回

豪表管領小説く密小奸謀と助く 泰勝放免と請て且奮僕小遇ふ

再説畠山左馬介持永ハ楠姑摩姫と眷意して其叔父楠式部少輔正直ハ

豪囑ハ婚姻の事を説遣ハ姑摩姫一切従うるハ齊天行者豪表ハ謀

計の随ハ七劫奪んとあつても疾く姑摩姫ハ悟らば大に恥辱を被りければ

怒ると雖も為術と知遊佐就盛ハ商量ハ就盛三椿の法を説て媒約せんと

いハ持永更ハ歡びて條持媒鳥ハ京都への使を命ト歳暮の佳儀と称へハ

國産数種株齊せ密意を恣々と言舎めハ手簡を投出て與へけハ媒鳥ハ肯を

領掌ト即て京都へ上りハ満家の前ハ出事の情由と悄悄ハ報て件の手簡を

逸與るく満家は是を披閱る赤坂の下に著てより昼夜肺肝を碎きつ
 きぬぐぬ差を換て姑摩姫が莊院を窺へども表皮の光景を知るのよめて内密の
 姿ハ識ぐけ六靴を隔て癢を搔く心地のよと詳悉るる依て愚按を廻ら
 ず假の他と智姻を結び宿所の迎へて虚実を捜らふ心操亮然と七分明るる
 他若異心るる時ハ既の稟上する如く幾個の勇士悍卒を得るの増て當家の干
 城とるるものもむぐ子孫の智勇の者も産まば上の對しとも忠るるべし彼反額を
 浅利餘一が請うる先蹤るるものも然とて在下色迷ひく稟をとも聞者も
 唯封臣の後患を絶て當家閑運の吉瑞と做しめんとし尚亦怨敵の志を掃
 き其色願もてやば然ハ一個の婦人あり縱令幻術のりとも宿所の閉箒
 たるうハ何程のうらむるべき結果んより石を以て卵を壓ぐ如くも下此を能
 御賢察のりて尊慮のも慥を在るべし日外五十日槌隆光が夜稠甘時奪取

たる。楠家の重宝錦の御旗菊水の旗代々の古文書那時没官せらるる東西。御
 許の在る其賜も納米とむ姑摩姫必す許諾せん這一件ハ在下が弱冠の
 疎忽のよ何内守の豫め商議するも委き情由ハ就盛が年始の
 佳儀の出来せん刺直の稟上る旨のべしを記するける満家の素より愛児の
 持永のうらむる這ハゆき大事も左左右々ハ許可もせ先豪表を
 招来らしめて件の手簡を指示し老師ハ何と聞るる愚見が卒尔の了
 簡の毛を吹て疵を求る端とやうんといと危殆し那楠家ハ俺祖父義深の時
 多く代を累ねるる怨敵の過頃姑摩姫が獄舎の在り人をとて数殺さん
 と為しるもはま寛氣極を解べらば萬の一も過差ある世の胡慮とるる
 り然とも老師の示教ものると問ふ豪表横手を拍て這籌策決め妙之
 現郎君ハ今世の多く得難き才子のよと頻賞てさ日や義の貧道法術を

以て那莊院を残り隈なく窺ひ知てはども姑摩姫が心術の今些疑ひま他
 む些少の幻術ありて心地を露さまば之を欺き謀らんぬ色情の過るる
 色慾一番萌を時ハ那幻術ハ尾の如く解て效驗のさるる凡て法術の習より
 さとご其人を得ざる人ハ出家の色慾を説んり憚るはあはれは黙止て今ま
 稟より然るを即君弱冠小し思召出さまは実ハ庸もどと謂べし猶
 疑し思さまば一識を菩薩の力をかりて其眞験ハ因言のせくと道さる
 袂撥合せく印と結び眼を閉呪を唱へて念ぶる半响許徐く眼を開き筈
 余と咲てのひけるハ貪道目今神通の三昧ハ入て規ふ小即君の筹りあり如く色
 慾をのり他の中らハ心と轉と吉とさるる疑もさるるのうら那姑摩姫が強
 情の父祖累世の怨家とて當家ハ心と措まば急速ハ兼引べくまは
 ども上の権威を以て名とさる時ハ忽ハ違誕の罪とさるべけまハ兼引りもど遊

佐氏ハ此美を以て計策んとりつるる然も他ハ柳營の御説とのと輒く
 信容なき者らハ猶遊佐氏と相謀りて箇様々ハ行ひのさるる道々
 ち終る美伏稟まは流る赤坂の御館ハ泰るるのらハ彼冲天の術のとも
 折んるハ貪道ハ掌の中ハありと其謀界を漏なく告てく一度即君と枕席を
 共ふ廿六他ハ心ハ漸ハ解て寔ハ飯降まは其ハ希代の名法ハ相忘りく
 ねど期ハ臨まハ即君ハ授け稟まは遊佐氏ハ此等のりを正直ハ
 むど他ハ不才の魯直入るるハ姑摩姫が敵手ハ足る者らハ然も言を傳ふるハ
 他より外ハ其人ハけは嚇し哄して逼らせらハ竟ハ成就まはるるハ遊佐氏ハ
 令せ附て心を用る助けるハ脱落のるるハ貪道も那里へ往て相共ハ商量
 度けまは嚮ハ太上皇の敕使と號して姑摩姫と面を契せ上ハ千雀萬龜の替
 嬾ハ木の端の様る老僧ハ良しなれば此美ハ用捨ハ入へ然も別ハ檀を設けて

男女和合の法を修し且幻術を調伏す。此修法火其男女の本命の支子の
 八字を以せざる行ひたつ所なり然るに又箇様々小謀らひのり姑摩姫が本命
 知るよりいふん是も亦遊佐氏の吩咐のて整ふべし彼主上洛せらるる試み先
 其所存を這方より問ひ人貧道が前知しつる小毫も錯らるるべし其の向來の
 計策も羞むるを知らせぬ疑ひのりつる手小把るる演し満家疑忽
 然水解する共其持水が才智を屢賞らるる満面花を開き東西許多取
 出て豪表が布施ぬ曳き労を謝しつる春と約つて其日の暇をらせぬけり介程小
 翌に應永二十年の正月ふりごと持水へ片田舎小在けり省きて何の儀式
 某朝の間に近郷の目代地頭莊官等が佳儀演ぬと来りし對面一家隸
 命して遠侍して不皿酒の式例の如く果る後へ出仕せし處も花洛の方の
 春色漫ふ紫出らるる徒然なるまゝ那智姻の手段とのそを左に思ひ

續けて惘然として在ける處へ媒鳥が駈兵回つて来て京よりの返翰ありとく
 泰勝が披露し忙しく把て閱る父満家の直筆ゆく那智姻の事へも
 閑るゝな大事るる来春遊佐が上洛の封寛釋小釋と商量し急遽て
 後悔する其返言の密議の與縁持媒鳥ハ扯ち措て正月の初旬小下とて簡約
 書しつる持水とて泰勝の者せし情を譚らふや和郎ハ什麼を思ふらん
 如此て成否おつる何とす就盛が上洛を待り旨を遊佐にも尚又這
 由を意得ざる有べし和郎ハ今より大詛り那里往て情地傳へ能
 憑置け明日明後日就盛も必上洛せん道ハ泰勝畏る仰の計兼ぬ
 就て願ひをたまふ那智二郎が事ハ他往時おん便室近く不敬を犯し新
 件の轎子小駈入て在ける不測の曲事と稟せども原来匹夫の草賊が礼法の
 拘る者ハ非ざる一旦の御憤ハ理より一箇の遊佐殿の要らんとてむせ者

二箇又向後も用ひ多うんと那儘ふて當館の出入を許し遊佐も不快ふらん右も左も右も左も下臈口の悪き他那時の機密をも多く識て人の難面く遇ふ世間の漏れども稟ぐ一然も曲て御免を蒙り時におん倉漏へ出入せしを餘る酒殺を惠まぬ他も又恩を慕ひ徳と感とあん與ふ做るものべし且の豫ても稟一可小仇持身多る唯一個の若黨さふく萬不便の辨もつら那荷二郎が面魂一僻のべく所見され出行時召俱て其頭の要ふ充んと欲さるる除非那白痴物が異心を抱き小可斯てつら上の辨も臨みて立地の結果も亦甚容易一是一事而用されば只管免さるるくつと屢て止さるる持永要時尋思と現ゆ外も一理ありさるる他其夜艾轎子の中お懸居る大胆不敵の事も更なり什麼なる事情とも俺今尚意得がら然も再び召寄て詳く推問せし上おさせる不良の心ゆ

登時の免除もさる。這等の辨も就盛の照火面の封譚ひ見下那首の知さるるのやわらんとひけま。泰勝唯唯と言稟し。深藪並の面を覆て輕卒一個を若黨と。奴隷の礼服を會齋せ遊佐の城へ赴き。町盡処ゆく衣服を更ぬ。城中お入て持永が使者より由のひけま。就盛即て對面して年首の口誼辨竟ま。泰勝声を低うして別小梢の稟せとて持永が稟咐するり。要時近衆を遠放つやとつら。就盛點頭て然ら。使室へ通ら。けや。年始の佳例の。酒をも一勧めんとて侍共お吩咐て閑室の伴お間もゆさ。童扈從が交代の持運ぶ古昔時繪の重宮の故実もさる。長柄の鉢子もさる。就盛勸む間下物も増て思ふ。半酣お及ひける時。就盛左右を退放て。左馬殿の密議と。那姑摩姫の。笑つ。同。泰勝も莞尔と笑て。那姑摩姫と取らん。と。様。心を尽さ。逸く。其礼を猜せ。まて。再度の。不覺を採。よ。ハ。既。知。せ。の。か

如ごと然ごとると小こ殿どのの御ご計けい畧りやくを父ちち管かん領りやうへ由よしと報ほうて表へい向きやうより媒まひ灼やくと娶よめらんととの事情じやうじやうと
 即すなはち京きやう都とへ稟りやうし小こ箇か様やうに小こ回かい答たうせらるると近まじ日ひ御ご上じやう洛らくのをり管かん領りやうの得とく心しんせら
 るとやうとの賢けん慮りよを希ねがふと所ところへ稟りやうせしとゆゆににねねどと那な管かん領りやうの文ぶん體たいの綺き煩はん重じやうけの所ところへ
 尚なほ念ねんの與よ在あ下したと使つか者しやとと憑たも参まらまると綺き細さい詳じやうの演えんけの所ところへ就すなはち盛せい頻ひんのち点てん
 頭かぶき箇か様やうのり小こ箇か係けいのり俺おれ們らのり用よう捨すると外ほかのり左さ馬ま殿どののり憑たもこ
 ると思おも衷しゆうの限かぎ周しゆう旋せんと必かな整せいへ参まらまると酷くらの心こころと苦くるしめのひを明あ后ご日ひ上じやう京きやうを
 ると管かん領りやうの拜はい謁てつとと這こ儀ぎを計けいらの稟りやうとと此こ旨し稟りやう上じやうへとのり快こころくの諾だくひ
 けの小こ茶ちや勝しやうへとと謝あやしの罷ま回かいしの然しか稟りやうさの持もち水すい安あん堵と致ちさの畏おそての應こころ答たう
 ちの又また道みちかの序ついで次ついで小こ在あ下したが願ねがへのきのひを試こころみの稟りやう上じやうんの飲の其その別べつ儀ぎのり
 二に郎らうが其その夜よ女むすめのり中なかつのり轎こし子このり中なかつのり小こ箇か係けいのり憑たもこの居ゐるととと後のち持もち媒まひ鳥とりがの見み露らとと

持もち水すいの報ほうてのひを持もち水すい大おほ小こ憤ふんりの成なり敗はせんのとと在あ下した中なかつくの賠ばい話わせのと
 さの遊ゆう佐さ氏しの面おもて對たいして免めんさのとと放はなすの然しかもも在あ下したが存ぞんずの他たのり面おもて
 免めん九く庸ゆうをの一ひと僻へきひの死し奴ぬれの殿どのもも放はなすの免めん罪つみをの放はなすの召よ措そせのらの具ぐ那な
 夜よの机き密みつもも片かた端たん識し者しやらの那な儘ままとと遠とほ離ろるの他た怨うらみの憤ふんりの禍わざはひ害がいをの隠ひそか
 るのもも右みぎ中なかつ左ひだり中なかつ久ひさ後ご長ながくと立たちの異い日ひの要よう備びんの兩りやう全ぜんのり免めんとと故ゆゑに
 其その由よし持もち水すいの稟りやう一ひと且かつと怒いからのとと方かた僅わずかに始はじ打うち解げての在あ下したのり右みぎもも左ひだりもも計けいらのと
 小この就すなはち往ゆくの所ところへ看みんの在あ下したのり餘あまりの二ふた人にんの仇あだと持もちての一ひと個この女むすめにの畏おそるの
 見みるの者しやらの一ひと名なの男おとことと萬まん夫ぶ不ふ當たうの勇ゆう力りきありの他た奴ぬ們ら備び這こ地ち小こ来きりの
 悼おそるのもも小このり一ひと名なの若わか黨たうにのけの小こ那な荷か二ふた郎らうとと身み邊へ使つかひて他た倘たう実じつ小
 取と服ふくせの一ひと方かたの捍かま城じやうのりのり小こ荷か二ふた郎らうとと時とき赤あか坂さかへのとと在あ下したのり
 下したが伴ばん當たう俱くせんのとと許ゆるすのとと胎たう悦えつのり小こ就すなはち盛せい異い議ぎもも及およぶの其その詳じやう



るが意得う。那奴の其翌朝回来とぞ憚ともいそねる。然る大胆と拵きし。拙老の
 夢中も知む疾知ふ。赤坂殿のあん賠話も稟せと。緩急の段是非の賢とぞ。
 這免の和主心得て品よく稟聞くる。原来那白痴漢の頭を刎た奴も。こども。
 希代の騙局を以て倒の使役ふ所も。あつんと。要時一命と助け措る。的の
 くる。殊更の所用い。尚和主も使はせ。赤坂殿の御要も。なる。あつ。拙
 老が素より希ふ所と。所て泰勝大の懼ひ然る。直の召連帰る。主人の賠話
 稟う。う。兩三日措て又と返す。な。う。こ。就盛点頭て。その隨意いせ。う。兩
 三日ほど度毎の断ら。及の。但。那奴の心術究め。不敵き奴。れ。道亡らぬ
 ちう。小心せ。忽緒。的。の。と。の。泰勝兼諾。七。杯盤を。辞。別。告。就
 盛が前を退げ。就盛の答。田騫九郎。小。吟。吟。荷二郎。と。隠。出。さ。泰勝の。遞。與。せ
 け。泰勝。と。請。命。と。即。伴。當。の。交。へ。騫九郎。小。謝。と。赤坂の。陣。館。を。投。し。く

久。回。り。け。り。當。下。夕。陽。西。小。落。て。雪。を。催。ま。夕。旗。雲。の。光。映。薄。ま。く。曛。始。る。黃。昏。時。候。の
 向。く。俚。の。未。通。女。が。衝。く。胡。鬼。子。も。手。球。の。音。も。外。小。絶。て。物。色。蕭。然。あ。る。れ。う。入。の
 荷。二。郎。ま。い。俱。く。泰。勝。の。又。礼。服。の。貌。を。更。に。蒲。編。笠。を。脱。棄。て。世。小。畏。憚。を
 回。り。去。く。の。但。見。ま。去。向。の。樹。下。の。藁。菰。を。鋪。破。手。巾。を。頭。上。小。捲。する。窶。く。た。一。個。の
 乞。児。が。ル。遍。と。ま。く。頭。を。叩。き。て。声。憐。げ。の。や。殿。様。お。正。月。の。お。祝。賀。の。唯。一。錢
 惠。ま。せ。賜。ひ。ね。の。と。と。勸。解。の。乞。ふ。を。前。の。輕。卒。の。若。党。が。声。高。ち。小。振。絞。り。て。
 女。と。是。這。奴。們。道。妨。の。這。頭。へ。出。て。什。麼。と。の。小。片。退。む。や。と。罵。る。を。猶。微。む。ぬ。ぬ
 檜。桶。と。突。出。し。や。よ。の。せ。御。慈。悲。小。と。黄。縁。の。間。小。料。ら。む。泰。勝。と。面。を。照。せ。て
 互。小。敬。馬。と。駛。き。け。う。物。の。し。ん。と。と。那。乞。児。の。想。ひ。や。返。さ。し。左。右。ま。く。の。ら。や
 殿。様。這。正。月。の。餅。一。ツ。も。飽。い。せ。ぬ。這。身。の。因果。も。原。の。こ。の。身。より。出。る。錯。力。も。
 附。及。せ。し。人。も。さ。ふ。も。有。ね。ど。今。い。又。奈。何。い。せん。他。所。の。軒。端。を。假。寐。の。夢。も。あ。る

往昔恨しきの一合飲せぬやん慈悲ありと口説が如く衝きしを那
 若黨の大い怒り這奴甚大胆なり我主人と執るる赤坂様の御家中
 多る小解らぬ謔言諄々と咄言許し置き置きと襟上把柄を曳居るを泰勝中
 喚禁めて今日大事の使節あるを乞見を命へく作麼あせんを那些退て通き
 や現這年の首より飢寒を只願の東西欲がるも無理をなす餅でも吃へと置
 紙幣を極搜りて錢二三文取出し紙を拈つて撲地と投ま音を葉小搔
 拐り上て数回押戴き天晴お慈悲お愛情あるお殿様のお賜物噫辱なり
 有難く介後とて久後かん目と賜りいへと追従輕薄猶諄々と几回となく咳を
 看ぬ態をみて泰勝の脚急去過ま跟るる奴隷が酷やく你们何時でも今
 日の如く主人を思ひなす當の鍵が外なるん果報的奴と一言を罵りさすゆく
 野徑の竹林の雀の声静まりて隱く見ゆる燈火の赤坂の館の帰り泰勝ハ

荷二郎と己が子房の等世置て独持永が前出遊佐が回答と箇様くと
 耳語告てその後那荷二郎と召俱し一五一十と話説りかう仕ては妙
 前罪を恩免りて在下小預け既り以別の異心もいんぞへ御婚期の期
 暨びて用のおもふもあつべしと忠告せしむるひ瞞ま持永再應心の尋念の暨
 心を遊佐も然様あつるべき要時和主小預るなり然まども那奴の癖者なれば
 小心をなすまはるひ由断して取る道と戒めらる許し置ま泰勝大の悦悦
 己が子房の退き出り急く荷二郎と喚出し晚飯と与へ酒を喫しその身も
 共小喫啖しとさ消地小譚らるなり嚮日汝を救ひしと與小心を配り長
 總奴を覘ひ見まども未日と経ぬるまは這ぞと思ふ證據も出でざれども竟ぬ
 他が本意を探らんのも難くあつるまは先方便と以て郎君のおん怒と勸解
 遊佐氏小乞取て箇様く料理ひまは今日よりと俺方小和郎と措き異うハ

前篇の作者
多氣と誤て
多氣の作
多氣郡名
此當殿の弊
多氣と誤て
然るに今
更其誤と
むれ多氣作
るのの首官
為ふ紛ら
うんとして

わらむ但時々の遊佐の城も。回つて那里の容子も。覗ふとそこらも。且久後の憑ひ
て。大事ものまど。開より。靦面りて和郎と。勞まへる。開の方。纒。回り。路ふて
東西と。乞うる。乞巧奴。ぐりよ。那奴と。面と。照せし。時何と。中らん。認得る。的。小肖
たりと思ひ。い。急。小。案。ひ。得。ぎ。り。小。徐。小。考。ま。他。の。俺。身。が。伊。勢。の。多。氣。小。て
使。隸。ひ。う。草。履。取。め。名。と。敵。介。と。の。的。之。郷。向。小。稻。城。が。女。兒。信。夫。と。豪。奪。し。て
其。父。親。の。丈。作。奴。と。殺。し。る。時。も。芥。田。與。記。右。門。山。勝。杵。内。と。の。ひ。若。党。と。共。小。密
諷。小。関。り。が。絆。金。露。頭。小。及。び。う。時。與。記。右。門。杵。内。の。斬。罪。せ。し。敵。介。の。追
放。せ。ら。れ。然。る。小。介。後。怎。小。と。那。様。体。の。做。り。小。けん。左。小。も。右。小。も。俺。と。認。り。て
敬。馬。さ。る。体。の。い。言。と。設。け。て。哀。憐。と。乞。ふ。意。と。急。く。猜。し。ま。へ。小。銭。と。取。ら
る。や。う。小。金。二。三。歩。と。與。措。う。さ。も。猶。俺。這。所。小。在。と。若。党。の。輕。卒。奴。が。高
ら。小。言。聽。せ。ま。へ。那。儘。小。て。棄。措。ぐ。て。さ。の。他。奴。も。聊。の。才。覺。あ。る。的。小。は。

奴隷の小と駈役の。它的。勝。多。一。倘。打。棄。て。願。着。だ。他。の。怨。も。仇。も。的。の
幫助。あ。る。ま。も。の。ひ。難。一。さ。ま。へ。う。く。這。處。へ。曳。入。ん。と。乞。巧。の。形。小。外。見
多。一。因。て。和。郎。と。勞。ま。る。今。よ。う。他。奴。が。在。處。と。見。ね。て。絆。金。と。説。听。せ。這。金。を
の。て。身。の。装。ひ。と。他。郷。小。至。り。調。へ。日。数。と。歴。て。き。り。氣。無。く。訪。來。る。や。う。小。料。ら。小
へ。よ。く。酒。喫。て。快。く。往。ね。白。昼。め。て。妙。さ。と。と。金。一。兩。と。遞。與。ま。へ。小。荷。二。郎
異。説。を。領。掌。し。て。開。の。奇。妙。さ。る。の。小。他。奴。が。且。那。と。認。着。し。を。り。絆。金。の。氣
の。推。查。し。ぬ。さ。と。伊。勢。め。使。ひ。の。ひ。敵。介。男。で。い。う。さ。ら。バ。急。く。喚。寄。ら。れ。て
お。ん。便。利。小。さ。る。の。ひ。と。一。走。ま。る。と。來。ん。と。そ。が。伏。立。て。往。け。る。が。半。時。た。り
あ。と。立。飯。り。仰。小。任。せ。て。那。樹。下。小。見。ね。ぬ。さ。の。ひ。小。開。外。小。を。と。遙。小。這。方。の
灰。廬。の。軒。下。小。寐。轉。ひ。う。く。と。喚。寤。り。絆。由。と。説。听。せ。し。小。始。ハ。匿。し。う。く。も
竟。小。實。と。吐。て。小。那。敵。介。去。給。の。春。且。那。と。共。小。伊。勢。國。と。追。放。せ。ら。れ。ん。と。も。

素より他邦の親類もなし。然と國中の徘徊せし捕へし斬るべしと聞えし。幸うと大和の立越え高市を吟ひて賭博を好む。銀一錢の本錢を六。剥盗と業と。怯弱人どもを嚇して此の本錢を設けり。金博奕の輪盡しければ。伏家の奴們が醜態を命て無底の不九郎と喚びぬとぞ。此底の無き囊の東西を。入ても溜らぬ如く。他が博奕の下手なるを嘲る共。鳩鴉の鳥が夜々小鳥を取喰らふ。剥盗と擬へし木乃句るべし。とて敵介の悟らざりし。竟れ自己も不九郎と名号する。とふるべし可笑きゆゆの如く。或時一人の旅人と利んとする。案外はその。旅人が心剛なる手利の如く。股と肱と小あてり。瘡を二箇所負せし。跟。迹と晦まき。逃まじも。其痛大の敷して腫上り。うけまは辛くも。残金を懐ふ。龍。神の温泉の赴き三廻り浴して愈まじも。衣服へ更り。脇差を賣て。病賃の充て。まは更の亦剥盗も。とぞ。為方も。落魄て形。の如く。非人。成下り。うり。と。又。

偕て剛才且那を見と不審め。いづ言を設て外ら。身の不造化を訴へ。果して三歩の金を贖ひぬ。明日の垢衣の一領も買ひて来り。這御館の参りて。訪ねをうんと。思ふ折々。又更の和主を使ひ賜り。一兩を賜へ。まは天の。登る心地。快く他郷に去て。打點を敷。いづ就て。参りて。拜謁せん。其時。意。衷の。みども。尽し。と。おん。禮。稟。ま。と。と。大。く。歡。喜。し。り。ま。は。不。日。参。上。せ。ん。必。定。み。の。ふ。恭。勝。点。頭。て。ま。は。那。奴。の。心。易。り。来。ら。ば。情。由。を。郎。君。の。稟。上。て。這。方。の。留。め。ん。その。序。次。大。和。郎。が。緯。も。尚。克。提。成。稟。一。置。て。恩。顧。の。者。の。做。を。死。ぞ。心。長。く。時。節。を。待。ね。俺。の。今。も。七。獨。身。あ。て。萬。事。の。心。細。く。り。今。給。の。運。氣。の。直。り。あ。や。年。の。元。月。の。元。日。の。元。日。の。元。日。即。時。和。郎。が。幫。助。を。得。る。う。人。の。敵。介。之。來。集。り。世。の。怖。し。き。的。の。り。い。ざ。や。祝。壽。の。喫。く。と。又。殘。飯。を。取。出。し。柱。の。柳。の。勸。む。ま。は。荷。二。郎。も。笑。坪。の。入。て。更。闌。る。ま。は。醉。を。尽。し。其。俵。倒。し。ま。は。寝。入。り。け。り。ま。

第四十二回

権門小媚て就盛君命と偽る
姪女小通て正直親事を促す

却説遊佐河内守就盛ハ正月三日ハ河内國石川郡と打立て京都より將軍家
義小年始の拜賀を稟しける。稗果て管領畠山尾張守滿家の邸小到り同く
佳儀を演けし。滿家就ち書院へ請ふ。恒例の式竟て後所要もみく。今暫く此
處あり休息せらるべし。公用果る。緩くと御意得。たつる。きむも非ど。就盛を留
置て滿家の室町殿へ出仕しける。亭午過る頃。回り来て。閑室小招き入れ。茶を點
菓子。勸め更。杯酒を整へ。就盛を管待。ゆを。左右を遠退て。膝を合せ
貝く。や。知らる。如く。姑摩姫。去秋。五十日。槌電次を討。る。驍勇智謀の賢
る。驚く。小餘り。あり。等。間。小。し。と。棄。措。終。小。六。國。家。の。禍。害。と。も。曳。出。さ。へ。く。思。ひ。く。
愚蒙の兒。左馬介。と。萬。事。貴。殿。小。打。憑。と。て。八。九。の。莊。院。と。按。察。せ。ん。為。赤。坂。の。陣

館小遣し。る。小。想。係。る。く。那。姑。摩。姫。と。拙。兒。ハ。娶。ら。ん。と。い。ひ。お。と。せ。ぬ。強。ち。小。色。小。弱
と。て。所。望。ま。さ。る。と。も。聞。え。ね。ど。も。他。女。が。強。情。も。決。り。て。隨。順。さ。さ。る。る。鏡。小。災
と。く。着。が。如。く。任。他。適。ち。路。さ。く。と。假。小。親。事。と。許。諾。と。も。弱。冠。の。拙。兒。が。配
耦。火。手。小。餘。り。る。心。地。と。持。煩。い。ん。と。危。殆。く。を。と。貴。殿。小。も。商。量。し。う。と。又
る。ハ。実。小。然。る。り。る。狄。貴。殿。の。妙。案。怎。生。と。問。ふ。就。盛。悄。り。き。回。へ。く。仰。一
遍。い。さ。る。り。小。い。但。し。在。下。が。存。在。る。小。女。ハ。總。て。水。性。の。的。も。バ。除。非。姑。摩。姫。只。今
と。と。父。祖。の。遺。訓。と。一。涯。小。守。り。と。任。情。を。稟。ま。と。も。一。度。枕。席。を。交。し。る。小。漸。く。怨
恨。も。解。ぬ。べ。し。さ。ら。ば。憂。と。一。轉。と。歡。喜。と。さ。る。り。も。と。そ。い。好。些。さ。異。心。あ。る。小。も。逃。へ
拿。せ。の。ひ。て。小。畢。竟。一。個。の。少。女。子。り。四。相。を。悟。る。才。あり。と。幻。術。を。能。ま。と。も
怎。程。の。り。り。小。い。齊。天。行。者。豪。表。が。法。力。も。い。か。開。ハ。怖。る。小。思。ね。ど。も。南。北。朝。の
おん。事。と。累。世。冤。家。の。故。を。と。決。し。て。從。ひ。稟。ま。す。因。て。在。下。が。存。在。る。小。ハ。是。を

上へ稟上てかん旨を請ひ南北西朝御和親のうへ其臣互不遺恨のふを。
 楠父子の輩へ代々南朝のかん與小屍を戦場へ曝し居る忠心無二の将たるべ。
 开後るきを憐みのふ僥倖ふと姑摩姫のさきども女流のるるれ八所領を與へ
 臣ともあつて依て畠山満家の父祖の時より河内を領して代々楠と鶴を別り一奮怒
 最弟一とまばこま子左馬介持永を姑摩姫の配耦せ奉る晋の好意を結ひ六
 冤氣始て氷解して永く恭平の瑞さるべ。然らば久後持永小楠氏の奮領を支ち
 與へて出生の兒小楠を名告せ祖先の祭祀を嗣せし。就て先その納采小鶴の没官せら
 ざる。楠家の重宝錦の御旗菊水の旗且の亦正成己来の舊記どもを更めて音
 物とせし。とて大槩の整ひ以ん侍て他が叔父正直と嚇る威嚴を逞しうして
 假親と做し姑摩姫を介抱して赤坂へ嫁らるべ。若舊態をふるも松令命の従ひ
 なるべ。姑摩姫のいふも更なり。正直も違誕の罪を糺さして重き科條の處せらる

べしと吃と囑命る。緯十二分小敷正のさん放佯ても姑摩姫従へば將軍家の令と
 听ねる名として結果る法もあつべし。又正直も他のぬ違誕の罪を糺さるといふ
 叔父を害する悪名のも必従へて去るべき愚按へ如此るまばさ左馬殿の御高
 議小加つてにさるる。さきども賢慮の愧つぬ欽覺束なくのといふを所て満家の
 肚裏小想ふやう。け小豪表が前知小違誕を就盛果して將軍家の御誕せせ
 せんと説り然らば向來の緯どりの必行者が神占の漏るるのハあつべうらむと疑念
 忽ち解しう。想のど先介と打笑てゆる。趣开意を得る。響小行者豪表の
 這一條の吉凶を問ふ。既小貴殿の謀畧を一事も錯へど前知して遊佐主來
 春上洛のうへ。箇様く小謀らるべし。甚妙計なり。然れども尚りて他
 南朝の餘孽も上への御誕とのみと雖ども死のりく推辞ひるもあつべし。且
 正直の義絶の叔父なり。今へ上の嚴命めて姑且和順をとりども心を放さるべ

ひけまは他一名のうらみど。願ふき氣象ふらむ。依て今些妙なる處の同くい
 嗟嘆の太上天皇の勅詔にて正成が後と憐ませゆふこと。此事心然成就。一嚮
 一千金と賜ひ折も柳宮の對しなり。さかなく不敬の語を吐くも太上天皇の恩賜と
 のみ。推辞なら。那金を受納むる光景にてその成不吉を知るべし。又り這談の
 如何のうき。このを就盛只管の横手を拍て感心。今始ぬ行者の神通。今番
 在下が秘策を急くも知て告らるる。回さくも怖るべし。開へ尚其該の緯より太
 上皇の勅詔とよく接ひ着きて。智畧とのひ法術とのひけ。この妙策の
 べくもいふ。この満家手と掉て這箇一個の難義。この一件を明。地の上
 む。稟上さうり。開へ想うても看ゆべし。怎の所見さる緯もさか父祖代との怨
 敵。楠氏の孤女と娶るもどゆ。及く其御猜忌を蒙るのみ。おらん上。誦者の
 口とも開くべし。且今年の御讓位の御沙汰も。開時小姑摩姫。怎る叛心と

抱ん事も料り。さう。六旁然様の緯と。當職の居る俺們より。目今の稟上さ
 け。假令督姻整ひ。さう。も當分の秘措。決して口外さく。さう。倍箇のよく。姑摩
 姫が。另心さく。究ら。開時へ謀計の與。小妻時持。永が。妾の如く。召使ひて。試
 と。緯も無氣の稟上せん。遮莫姑摩姫肯。い。と。緯。尚。變。卦。小。暨。ひ。太。上。皇。の
 勅。宣。の。ひ。上。の。誑。意。の。ひ。事。の。尙。御。耳。入。と。ら。六。罪。へ。俺。們。一。家。の。在。ん。這
 義。の。怎。麼。さ。く。ら。ん。と。又。ば。就。盛。小。首。を。傾。け。そ。の。仰。ゆ。ひ。と。も。其。り。賢。慮。の。遇
 う。る。欣。好。些。姑。摩。姫。這。機。を。猜。して。兼。伏。せ。ざる。事。の。り。と。も。當。今。在。下。が。手。を。超。て
 何。處。へ。出。て。訴。訟。ふ。さ。家。隸。と。京。へ。陞。ま。とも。その。訴。訟。の。管。領。の。必。所。知。の。係。る。べ。い。れ。ば
 是。又。防。ぎ。の。ふ。易。し。開。も。も。さ。く。然。る。緯。の。さ。道。程。の。間。者。と。出。て。措。て。尙。在。莊
 院。より。京。を。望。て。走。陟。的。の。り。も。せ。六。暗。擊。の。し。七。口。を。塞。ぐ。ん。這。等。の。緯。の。機。の。應。下。
 變。の。應。下。と。在。下。が。禍。害。を。防。ぎ。さ。く。お。ん。心。易。く。想。ひ。さ。く。と。下。千。の。一。個。も。緯。發

覚るが會在下り身の曳負て肚撥斬ん分のり。這是累世御被官する鴻
 恩の報い稟まへき微志もふいと。さも潔白く道放て。満家大の歡喜で吐
 憑き貴殿の義胆這上へのふり。除非這辨發覺て貴殿の身上の
 係るとも俺們が侍て在るうの身代て救ふべし心勁く想とよまうとも。這の
 千一の事。這妙策の豪表行者の未然と查せし神美うまへ成就せん疑
 慮さ。さへ決りて那些のりも心の莫懸らまを。左も右も這一條の貴殿の
 任せ稟るまへ隨意料理せんべし。尚豪表の所説ゆ。姑摩姫の幻術あれは
 縛と左右の假托て遁るるも。あるへけま。兼語するその時。他が本命の
 支干の八字と證據の與の寫せ。又抑八字と。漢土後世の習禮のその媳婦の
 産とする年月日時の支干と。寫て誓の家。贈る式せ。と。庚帖と喚做す。我上
 古小婦人の諱と丈夫と定むる。男子の名告。と相肖する意。う。我邦の誓姻の

未例のたのり。姑摩姫の文学。那些の縁由も知り。他日違變の
 ら。據のハ必通りて寫せ。且その本命の支干を以て調伏の法を行。那幻
 術の忽破。縁を結ぶ。至るべし。と。回さ。説措さ。此。克く意得。正
 直。傳托せ。兩三日の中。那楠氏の重宝を齎して。條持媒鳥を下。ま
 へ。當下の任。料理るべし。這餘の。八時の臨。脚力。道。せられ。べ
 傾。回。答。を。ま。き。と。縛。脱。も。く。誂。囑。ま。就。盛。懐。中。より。矢。立。の。筆。を。把。出。て
 疊紙。這等の由。と。未。女。く。記。て。美。語。を。満。家。般。く。小。安。堵。して。童。扈。從。を。喚。出。して
 更。小。鈿。子。を。加。へ。さ。せ。酒。肴。を。増。て。就。盛。小。自。ら。酌。して。強。勸。け。ま。就。盛。も。怡。悦。て
 醉。を。盡。して。や。く。小。辭。して。旅。策。小。帰。り。けり。然。而。就。盛。其。詰。朝。三。管。四。職。と
 首。と。し。七。知。音。の。方。を。打。巡。して。年。首。の。佳。儀。を。速。竟。り。熏。昏。頃。より。京。を。出。て。河
 内。國。へ。立。回。り。就。て。赤。阪。の。陣。館。を。訪。て。持。水。も。佳。儀。を。演。今。番。満。家。と。謀。り。

首尾を箇様にと低語示して如此の豫ての計畧十二分小教正ひくひり。と
 小持永大の歡び手の舞豆の踏を覚えど既咱東西小あつらひ如く漫小急
 端を就盛の推林めと声と悄め佞の謀り課せさきども那姑摩姫の輕くき婦
 人の非ざればおん心長く等せぬ一應二應の往復ゆるい決して會得の稟は
 らば京都小遣し措さる。條持媒鳥小嚴君の令含らるるもはは他が下着の
 其上と正直小稟與まべし必忙まりぬふと重復戒めて就て城へ回りける西日を
 經て滿家の條持媒鳥小密策を授け去秋隆光を誅せ折遊佐が許よりおこせ
 たる。楠家の重宝と納する宮を將軍家へ披露せし暗く小己が許小留措るを
 齎して伴當花麗小装束せ遊佐が城へ遣しけし遊佐も寔小畏まらるる面色
 去て媒鳥を上坐小請就し誑意の旨を听し小媒鳥即ち一揖して豫て吩咐
 らまらる如く太上皇の恩勅と室町殿の誑意の旨をいと鷹揚小述けし就盛

謹て美り馳て有司等小高談して正直と喚せける。就盛が佳料理ひい故に
 俺城中の甲乙も机密の漏んるを怕る。滿家と喋り合せ寔小京より命令
 たり像くおせし正直の恚るべし久夢も知室町殿の内誑なりと遊佐の
 城より使来りて即今来臨せらるべしといひけしは心廢繹からんと駭きて快く時
 服を更ぬり伴當を忙がて遊佐の城へ来ぬけし。就盛書院小を請し媒鳥を
 率て出て来り那督姻の一條と釋長女小説听せし太上皇の勅書をも賜ふきり
 らまども畢竟一家の内縁小面正しく公法を用ふるべしもあらねば特此と御書兵
 賜の然らざるも姑摩姫が疑念るきも非るべき歎因て柳營の御内書と官領小
 賜の者こそを以て賈据とせし姫も疑念るるごとく又那重宝を納米小走さるる庚帖を
 寫しむるまをいと嚴り命遞与りたる正直謹て頭を低熟听て大敬馬さ且ハ
 呆まらる術を知れ迷惑一身小輻湊する心地はまこと柳營の御誑といふ力なく。

伊弉册第五轉卷一

仰の趣逐一ふ畏ていと先御請と稟つて就盛の打向ひ語の端を更めく河州の
 怎と听ゆらん想係るに院宣御説畏てらんども進退谷る心地してこそいへ其
 故へ前番左馬介殿在下と招きて姪女が婚姻の緯を頼るふ黙止ごて那里へ
 立超え言と盡しと説れども他一切肯念と固様は稟断て強て其女僧小做
 らんと稟つて今番の開と六等しくらねど知る如き任情的の在下と平素小疎
 疎けは偏寵の推辞をるべしと貴老のおん提成めて這一件の煤灼へは官御
 免を蒙り七餘人小仰属らんと管領家へ仰達せしは無比類幸ふと恐る推
 辞んとまるを就盛听て居丈高のり開へ又怎とゆらくぞ听る如く上のさるるに太上
 皇の叡慮より出する恩勅のものと貴方叔父の身分として唯一女子の令姪女が
 固辞せしとんと一應の傳達もく這依小辞せしと六道難く入へ智向小左馬
 殿の憑とすうし事ゆり知らねども開へ普通の縁譚めて熟せざるも又世の常

今般のそとと固辞せしと違勅違説の罪を糾うるのぞある
 這辭は官領も久む稟さすう然ても貴方の辞せしと心を定めて回答れと
 想ひの隨小窘ひは正直の大鬼胎と不慮皆小汗沸て辛うと陳るや然兼
 まはと恐懼し違勅違説のつうへ再遍も再遍も姪女小稟諭と管領家へ
 這由と宜く憑と稟まは但姪女が強情の竟小遁る所なく怎様の緯を稟
 出んも料りがて是小當惑至極せりと慮を歎息しう久就盛をうやく面と
 和らげ然らば兼諾せしとみおん請は趣は在下解道稟上てん開へ安心せつる
 べし然而恚のゆめり宜是小賢姪女の義烈驍勇智謀幻術兼備しされば容
 易く納得せしとる貴方の小苦勞查入り然れども上の御意は畢竟貴方の
 姪女とまはと思召る而已ふし然る紛雜き情由も知食べきやうも然るを推
 過辞せしとる必御氣色多くと在下も御不審を被るも有へけは克

夫家傳第五 車卷一 七

謀略を籌計して左も右も今姪女の許諾する小料理とよ不肖なれども在下
 共小商量小預るへけは先や那里へおん旨を傳へ怎樣のつらやん回答を
 尋思もあらんと好意のりげの私語正直聊想回してさう直お八九へ赴き姪女
 かん旨を傳へし尙左右と辞さる貴老のおん指揮を乞ふ緯のらん萬事一昧地
 憑と稟をと繰返し道措て馬を急めて出行けり再説姑摩姫の前番如意宝珠
 陪の上境の路次にて奸人どもの商量りも畧奪んとをけるを快く猜し奇計を
 設け辛く虎口を脱き回し復一郎安次も遊佐の城より回を居忙しく出迎へ
 轎子の見えぬを訝り問六姑摩姫徐る便室小入て安次と垣衣とを身邊小近着
 有し次弟と語るゆぞ安次思ひを奉と握り開い安次は緯の按ふ持永盛盛
 們前般の遺恨と挿と豪奪見と謀りらん在下も今日遊佐の城の後刃へ
 泰りひひ小遠侍の等せ措て公用繁多るまはと成就盛ぬへ出ても来む一胸餘

安閑と時射を移し一後菅田鷹九郎とる男を出して這里の社院の田島多寡
 宅地の来由も宝珠院の智正禅尼小御所縁の有るを尋問ひひ小在下各
 へて京の八智正禅尼へ主人の姑へ這縁故と幼少の時那里面成長ぬ又莊院と
 田園と在下父隅谷維盈主君と親育せん為小當時室町家の御法をとり買拿る
 り其折の沽券契据の文書在り貢税の村長がひまふく相違與へ他と喫て
 問ふと稟て回りのひね按は是程の緯を以て在下を招くさ中も非を査する所就
 盛ぬも件の机密小関りて在下せおん伴當小立せと招き際取せうら小どらん
 今日より後在下がおん跟隨仕まるらば怎里へも出させぬと或は怒り或は歎きて
 悄地小諫とバ姑摩姫聴てうち領き你が明査此も錯む就盛も持永の荷膽と
 你を喚せうら小を儘道他們が謀らんとまも怎程のひら有るさども現小心小
 及とるけは小介後の何方へも戸外へ用捨走き然とども他們も亦這儘小と共さ

あつねは又術を換て二遍三遍も謀んとを較計らる。随分内外の心を配りて
脱落さきやうの爲に死の時不臨とて縁多し應なる。善策の幾個もあらん。酷き物を
想ひとて駭く色なき形容の安次の更なり。垣衣も开明。查ふ感服して萬神々しく
ついでせの人の後安んぬのり。執念崇る奸人の多有を亦忘れせん心の既其いん
んと随分小心仕らんと言稟して退きける。然るに復一郎安次の垣衣を商量て
内外の出入の心を配り農夫們が怠惰を禁む。此の由新もせきりし。或日楠正
直が伴當夥多連率て不意来ふけ。安次則姑摩姫小告て例の書院の迎へ
入る。姑摩姫も衣服を更ち出て年首の賀儀を演る。口誼竟りけ。正直も
貌を改め今日来る。辨男美小非む。持永管領小密訴や去けん。室町殿の御説と
遊佐の城へ在下と招き箇様々。道是うとて就盛が傳へ。旨を脱漏もなく説出
て既小怠る上り。在下ととも脱る。小路を再遍這首小来る。和女郎が

胸中と查せき。あつねは定ふ止辯と得ざる。這上の理を非曲て御説の従ひ
なる。嗟峨の坐を上皇の恩勅とあつねの父祖小對して遺訓小定るといふ。づ
ら若又和女郎が猶悟らどて強て推辞て従へば。違勅違説の罪とせられて不測の
禍害與る。佳の正直が身上の安危も开首の量難く。然るに和女郎が而己
たむ。在下一家を助ると想ひて御稟せらる。と他のうへ又自うも拿交へつ
諭し負る。語を听て姑摩姫の想ひど。怫然とせ。色を稍咳嗽の紛らして。肚裏小
惟ふ。さして持永の。満家就盛商量して。叔父を嚇して。前憾を尚も
遂んとする。小と想ひ。此とも愧ららど。面を端して。静小道中。想ひ係なく
妾が久と室町將軍の。嗟峨の坐を太上皇。大御心の懸させ。あひて
叔父君の令て持永と婚姻を勧め。のふと最も恐惶き辱き。數る。身小餘り
た。快御稟と稟とせ。る。と聊存る仔細も。是非小及。固辞せらる。

史記傳言五早六
十九



女々傳第五回巻一

九

手平五郎中

こまひめ

おまへ



女々傳第五回巻一

春三郎

正直逼苦勸婚姻
まことまじまじとてこんせんをすむ
いとう竹のみきをあらへま

おまへ

這旨を以て然るべく仰上らる賜つる。任地違勅違証の罪と甚麽様の令
 属らることも是非及ばざる次第のまは。辞まへき所もなぐいと。辨も無げ。道
 放て正直の喘息を衝き。要時困して忙然たりと。惟回して又ひき。その道
 辨まら。普通の遁辞といへ。其の然らる。其の稟上ぐ。和女郎の公界の形勢を
 知れ。恁一時地のゆるら。如此嚴重なる勅証。御証と。陳ぐる道理も。な
 情の任せ。固辞まを。り。稟上へ。和女郎が。恁も。道ん。在下の原
 是知。這媒。始の。响の。推辞。う。小。就成。皿。箇様。小。道。是。う。然。ま。へ。恁の
 解説。も。な。く。て。恁。で。回。去。る。ま。克。想。も。も。看。ら。る。べ。い。以前。南北。両。朝。と。立。ち。別。れ。い
 御。响。ら。る。ま。る。辨。も。有。べ。け。ま。ど。既。小。ち。ん。和。議。救。正。ひ。て。太。上。皇。今。上。の。御。父。君。と。御。坐。ま
 其。政。令。を。主。宰。ら。る。室。町。殿。の。命。ま。と。和。女。郎。一。己。の。了。同。り。と。然。無。愛。の。稟。難。く。
 曲。て。兼。允。せ。ら。る。三。方。四。方。平。穩。の。辨。濟。ま。さ。り。の。ま。は。再。三。再。四。尋。思。と。な。ら。れ。

一と諄々いひ。姑摩姫莞尔と笑ひ。淡き女児で。は。公界の辨の。知。ど。は。ま。ど。ま。ま。
 うの。事。を。ま。く。も。理。義。を。辨。へ。い。へ。最。初。より。仔細。を。稟。て。推。辞。ひ。難。く。も。な。ら。ね。ど。
 さて。女。児。の。人。惡。氣。ま。る。談。論。も。且。り。且。り。亦。至。尊。の。恩。命。の。對。し。たり。て。言。の。過。え。
 恐。惶。も。ま。は。特。地。稟。ま。さ。り。ひ。い。り。ま。ま。も。然。ら。る。小。宣。り。仔細。を。述。ぶ。辨。を。な。さ。さ。
 叔父君の。おん。前。み。て。最。も。無。礼。く。い。ま。も。意。を。静。り。と。听。り。抑。今。番。婚。姻。の。一。条。を。
 太。上。天。皇。の。恩。教。を。稟。ま。さ。り。り。妾。の。一。切。意。得。回。し。開。唯。う。も。首。め。ら。し。任。爾。太。上。
 皇。父。祖。三。世。の。忠。功。を。思。着。も。り。且。當。今。嵯。峨。へ。御。隱。遯。の。入。り。て。南。朝。忠。臣。の。後。を。立。
 の。の。を。室。町。家。へ。仰。出。さ。る。べ。い。や。除。非。又。仰。出。さ。り。ま。ら。う。と。も。義。持。決。し。て。從。つ。る。べ。い。
 ら。ぞ。并。故。如。何。と。推。て。も。首。め。ら。し。往。明。徳。中。御。和。親。の。响。さ。り。も。折。言。書。の。載。ら。ま。ら。う。
 御。兩。統。交。互。御。代。と。知。食。へ。き。御。契。約。を。義。持。に。拒。ま。さ。り。て。今。小。立。太。子。の。おん。沙。汰。
 う。ま。江。湖。上。の。風。聞。み。伏。見。宮。と。取。立。て。宝。位。を。讓。せ。ら。ん。り。近。き。有。り。ら。

稟をりて虚説り知れぬと太上皇の勅命を聊の事をも辞せしむる義持の
 意をいふ是等の重き御契約を打も措きて快く料理つるべき該ある一升とを
 除て女子一個が督姻の縁を左や右や提擲るを心得ねば是れ火男の仔細の必
 ずるべきものなり。仕地を左も右ももの。假令勅諭とあるも賤微き身にて對
 捍して所志をいへぬれども開の縁がらふこそ依り今もゆゑ御受禪の御誓約の
 違ひる上皇必御憤りて舊好の輩を召さるゝらん歎當下妾の室町殿の家
 隷なる畠山持永が妻とのて怎も向て節操を立ん又祖の遺訓の乖きてる千悔の
 其益多く亂離の人ともなう。而已蓋先代のかん胸の肩を比べ足利家の家臣が
 妻の事へ好くも侍らぬと御前約毫も錯をばと小倉宮の大御代と成る
 縁のらん開時の時と勢いよ因て只廢家系をいへばもゆゑ楠畠山の悲雙言
 畢竟忠義の與りたといふ和辭も開首の貞らん歎這の今も七歳とをいふ非だ

當時のさふて楠家の舊忠と賞せらんとんとらふ甲斐なき女子と立ちまはせとも
 叔父君正しく坐せぬ畠山が河内の守護とを放さして叔父君の一圓の賜ふべき小
 むくと叔父君の結々采地を削らるゝの更ぬ奴家の畠山が所領を分ちて當郡の内
 へて僅の地を賜へんと御説とも覺えぬほど又禮記の文の據て我父没しゆへ上へ叔
 父君と父とと其命を聴て嫁せよといふも奴家の意得難くは稟申、憚あつるも祖
 父頭殿左馬頭足利氏の降参りゆへより大力折を勢究りし故のよも非ぞ深き御慮
 ありける御事と兼まご正し切を遂めて病て薨ゆらん那周公が恐懼の日王其謙
 譲りける時死にといひ白居易が語を等しく成景の家汚名を削りかゝる是故を以て
 伯父正勝も父も忠義の二字の相代て父の弓曳き双を交て互に絶交せられたり。おん身の
 當時人質として北山殿の傍近く召使のよひへこの這頭の情由と知れぬ在り。
 竟小足利家の昵近と做と嫌忌に在る然る故ふ今も平しく親族の間をれども

猶疎々しくつるを過一頃室町にて得難き命と助らざる其時より身と隷は萬
 事後見と憑死き由義持のいそぎに御前約の絆ハ十分の遂させられぬ間も當時
 天下の権柄と執票さう將軍家の太上皇の恩勅といさう倦小前義を棄て屈て和議
 ぬい置かへん。恁此に這を御受禪の絆まひ送り誠意あるとも。おん身の猶子ふせむん
 絆ハ御免と被さく想ひはれは是私のふ非ぞ。又祖尊聖の御遺訓なれば。おん身と侮
 ると分听多ひを次小去殊強盗們が夜稠の駒不給失せ。當家の重寶錦の御旗菊水
 の旗已下の物と。婿引出せらるんと。満家のどろろ天下の政刑と司やを理非としす
 べきは管領の詞ともあやえぬ。奇怪。昨夜艾強人が。件の東西と盗と出でて。拿去るるの
 分明。當家の重宝小亮まら。急小返賜ふべき小まら。一と言の穿鑿も及
 び。開沢しめて没収らる。是忘るる道理ぞや。從計那御旗ふ疑似ゆとも。開縁故
 と明ふ此方へ告て。道理する。没官せらる。絆も有ん故。さる断る。徒小室町家ゆ。

管領家ふる識と藏一措て月と経るまで沙汰も。今更小拿出して。婿姻の
 目錄小載んとあつこと傍痛く。只一遍の穿議も。縁由と藏主へ告らる。おんハ
 那御旗ハ尊と。絆ハ一箇の贖物。開贖物と以て更小藏主へ佳禮の信小音
 物ふせらる。沙汰と限。管領の料理と。道と。法度ハ一箇の與小曲
 ぬと君自ら敗て。恁地小向て。民と治ん義持も听識。管領の稟と。まら。
 下賜ひ。おん君自ら法度と敗る。比類とやい。説ても著。那御旗ハ當
 家相傳の重宝と。身も家も換。可憐。實際も。然有
 として道の倦さ。這身小受へき所謂は。只盜賊が掠奪。と室町殿の更奪。腐
 拿。奪さ。東西とせん。争。重宝欲。と。開故と以て身と穢。名と腐
 と。べき事。の。這等。の。由。と。脱。も。回。と。復命。も。強。て。勸。め。ら。る。前番
 ぬも既。小稟。如。く。おん眼前。と。頭。誓。と。截。尼。法師。小成。さ。の。然。でも。猶。許。され。ば。及

小伏て父祖の君へ黄泉まで分解し侍ふべしと言語撓まぬ烈女の辨論舌疾うと遅う
 必免氣と念口して演く色は正直理義は通らして黙然として姑且ハ語を閉て居うしが
 慚愧うる頭ぞやうゆ拾げ和女がの所も其理あまご今と成て既具べくも在下も父
 祖三代の忠勤と想はぬ小あり祐ども故頭殿北朝へ一旦既降しあひし响在下ハ未切弱
 ろりしを質として室町殿へ参せらるる故と以て詳き俤ハ知ぎと室町殿在
 下と他事あく召使はとるべ在下も亦異心を存せざる年来忠を盡さんと想へ然
 る小鹿苑院殿薨逝のま御座の頭亦奇異ハ征天あり開免免氣と復と申和
 歌と彫うとと在下の看う俤なるまと那御座邊の外様のの入べきり非と
 ハ彼女密小穿鑿つり小南朝の餘孽さるべと先在下と忌嫌は終是當將軍
 家の御前と遠放らるる入小来地と之削らるるまととも照据るまのま
 御狐疑も解るるるべし嚮小和女即と赦免の响在下とも免許ありて加恩の地とも

賜ひまき左右の御恩と受載きて忠義と盡さんかと思へ然も和女郎は
 とも辞とべきのあふもとも太上天皇の勅詔と固辞奉る程るる嚮小室町殿
 小一と千金と賜ひも全足利家の吹捧あつ小開と辞せび脱と今番婚姻の
 一条と乞う強固く辞し奉る道せも果と姑麻子姫ハ容貌と位と改め開ハ
 日するもあつ那响の千金ハ艸々もあ室町殿と刺んとする志と忠孝とし
 て慰ませるるつり一勅命さる父祖の忠義と奴家が孤獨と恵ませるるつり
 故と以て遁る道と拜領し今番ハ開と等しと御誓言の御受禪も
 近きあふんとあつる俤の黒目も定らぬ父祖累代の怨敵うる白山と縁と
 結と仰らる院宣ハ憚らるあん僻事歎除非兩朝の義ゆととも君小大ト
 きおん僻事の御坐まき凡番も念直させらんや小御諷諫とも稟上げさるも
 枕聞食容らまどの死と以て争ひもろが忠臣の道とあがさるる況や侍るあん

企^き君^{ぎみ}の御^ご本^{ほん}意^いを^をら^らぎ^ぎの^のと^と室^{むろ}町^{まち}殿^{どの}は^は他^た人^{ひと}の^の忠^{ちゆう}義^ぎと^と押^{おし}て^て画^え餅^{もち}を^を做^しせ^せら^らう^う欲^ほし^し也^{なり}
 亦^{また}人^{ひと}君^{ぎみ}の^の道^{みち}と^とら^らお^おが^がえ^えび^び所^{ところ}詮^{せん}氷^{こおり}炭^{すす}董^{どう}猶^{なほ}の^の差^さ別^{べつ}も^もあ^あく^く強^{かち}取^とぬ^ぬ院^{いん}宣^{せん}御^ご説^{せつ}と^と宣^{せん}と^と
 も^も上^{かみ}の^の御^ご與^よも^も宜^{よろ}し^しむ^むと^と父^{ちち}祖^その^の志^{こころざし}を^を守^{まも}り^りて^て非^{あら}ず^ずと^と這^こ義^ぎを^を尋^{たづ}ね^ねし^しぬ^ぬ
 う^うと^と念^{ねん}慮^{りょ}の^の隨^{したが}ひ^ひ言^{こと}懲^{おそ}む^む正^{ただ}直^{ただ}再^{また}遍^{また}説^{せつ}べ^べき^きや^やう^うか^か黄^{わう}蘗^{びやく}と^と紙^{かみ}を^を啞^あ兒^いの^の般^{ぱん}く^く
 頸^{くび}を^を垂^たり^りと^と惘^{ぼう}然^{ぜん}と^と困^こり^り果^はて^てぞ^ぞ居^ゐら^らう^うる^る這^こ回^{かい}枕^{まくら}も^も漳^{じやう}長^{ちやう}々^々と^と楮^{ちゆう}数^{すう}必^{かな}定^{じやう}限^{げん}あり^り
 此^{こゝ}卷^{まき}と^と換^かて^て次^{つぎ}下^{した}の^の回^{かい}第^{だい}四^し三^{さん}回^{かい}の^の首^{くび}必^{かな}分^{ぶん}解^{かい}る^るを^を看^みて^て識^しべ^べし^し

開卷驚奇俠客傳第五集卷之一終

